

小学・中学7年間を一貫したやり取りの能力の育成

興津紀子ⁱ・園田伊公子ⁱⁱ・坂口瑞穂ⁱⁱ・柳田章衣ⁱⁱ・山口耕ⁱⁱⁱ・荒川ひかりⁱⁱⁱ

Developing Students' Oral Interaction Skills in Elementary and Lower Secondary Foreign Language Classes

Noriko OKITSUⁱ, Ikuko SONODAⁱⁱ, Mizuho SAKAGUCHIⁱⁱ, Fumie YANAGIDAⁱⁱ,
Koh YAMAGUCHIⁱⁱⁱ, Hikari ARAKAWAⁱⁱⁱ

1. はじめに

小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説外国語活動・外国語編，中学校学習指導要領（平成29年度告示）解説外国語編，高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説外国語編英語編において，「話すこと」の領域が「話すこと（やり取り）」・「話すこと（発表）」の2つに分かれることとなった（文部科学省，2018a, 2018b, 2019）。これらの領域は，Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment（Council of Europe, 2001，以下 CEFR）を参考に設定された。やり取り¹において，対話の参加者は産出的活動と受容的活動を交互または同時に行い（図1），話し手のメッセージを先回りして予測したり答えを準備したりと複雑な活動を行っている。こういった特性からやり取りの領域を学ぶということは単に産出と受容の各領域を個別に学ぶこと以上の要素が含まれ（Council of Europe, 2001），やり取りは学習の中では重要な位置づけにある領域である。しかしながら，これまで中学校及び高等学校ではやり取りや即興性を意識した言語活動が十分には行われていなかった（文部科学省，2018b, 2019）。学習指導要領改訂で，小学校，中学校，高等学校で「話すこと（やり取り）」の領域が新たに設定され，小学校3年生から高等学校3年生までの10年間を通してやり取りの能力を育成していくことが求められることとなった。

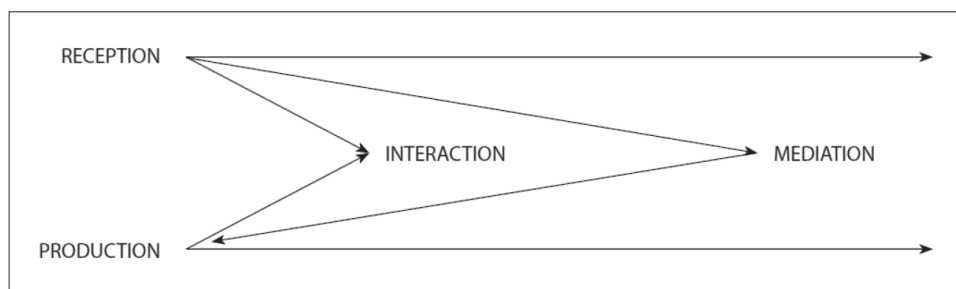


図1 受容的活動・産出的活動とやり取りの関係性
(Council of Europe, 2020, p.34)

ⁱ宮崎大学教育学部

ⁱⁱ宮崎大学教育学部附属中学校

ⁱⁱⁱ宮崎大学教育学部附属小学校

児童・生徒のやり取りの能力向上をめざすには、授業中にできる限り頻繁に教員とのやり取り、児童同士、生徒同士のやり取りの経験を積むことが望ましい。そのような機会を提供する方法の1つとして Small Talk と呼ばれる活動がある。中学校では「チャット」や“One Minute Chat”（ELEC 同友会英語教育学会実践研究部会，2008）という名称で Small Talk が実施される場合もある。全国の小学校・中学校の多くが Small Talk の実践を行っているが、各校種の各学年の教員が個別に指導を行っており、校種間の連携を図り複数の教員が系統的に指導を行う事例は管見の限り少ない。

宮崎大学教育学部と附属小学校・中学校の外国語活動・外国語部会では、小学校から中学校への学びの接続を意識した指導の在り方を検討し、7年間を通したコミュニケーション能力の育成を目的として共同研究を行ってきた。2021年度はやり取りに焦点を当て、Small Talk（小学校中学年ではやり取りの言語活動）の系統的な指導について検討してきた。本稿では児童・生徒の実態を踏まえた Small Talk の7年間の到達目標設定の前提、設定のプロセスとその到達目標について詳述する。この取り組みを通して、小学校と中学校の教員が「育成したい力」を共有し、7年間を通した一貫性のある指導の実現を図ることをねらいとする。

2. Small Talk の到達目標設定の前提

本章では、Small Talk 到達目標設定の前提となる Small Talk の定義、CEFR 補遺版の口頭のやり取りの CAN-DO ディスクリプタ、日本の外国語教育における会話の方略指導について述べる。

2.1 Small Talk

Small Talk の意味は「世間話」や「雑談」であるが、小学校においては、高学年で設定された「2時間に1回程度、帯活動で、あるテーマのもと、指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりする」（文部科学省，2017，p. 130）活動と定義されている。既習表現を繰り返し利用して定着を図ることや対話を続けるための基本的な表現を学ぶことをねらいとしている。この「既習表現」というのは、現在学習している単元で扱う言語材料はもちろん、過去の学年や単元ですでに慣れ親しんでいる言語材料のことも含み、既習表現をスパイラルに利用することができるように教員が話題の設定を行う。5年生では教員の話の聞いたり、教員と児童がやり取りを行ったりするケースが多く、6年生では教員の話に続き、児童同士でやり取りする機会が提供される。小学校中学年では既習表現の定着を図ることを目標とはしないため、附属小学校中学年でも既習表現の定着をねらった帯活動の Small Talk は実施していない。しかし、なじみのある定型表現を使用して教員と児童、児童同士のやり取りを推進しているため、本研究においては、Small Talk ではなく、やり取りの言語活動という括りの中での中学年の到達目標を検討する。

中学校の Small Talk では生徒同士がさまざまな話題で30秒から1分程度会話を続ける。その際、単元で学習している言語材料を意図的に使用させることもあれば、話題に応じて自分の心的辞書（mental lexicon）から適切な表現を検索して使用させることもあり、Small Talk の解釈や使われ方は多岐にわたる。中学校の検定教科書では、第1学年に基本的なやり取りの方法を記載しているケースが多く、「チャットができるようになること」を1単元の目標として

設定し、やり取りの基礎を身につけさせるもの（本多・金森他，2021）、帯活動として使用できるやり取りの資料を巻末の付録として提供しているもの（太田他，2021）、単元間に言語の働き（例 会話を始める，あいづちを打つ）を提示してやり取りに組織的に取り組ませるもの（根岸他，2021）など、生徒のやり取り能力向上のため、各社が独自の工夫を施している。

2.2 CEFR Companion Volume の「やり取り」

CEFR Companion Volume（補遺版）（Council of Europe, 2020, 以下 CEFR CV）によると、やり取り（Interaction）には口頭（Spoken interaction）、記述（Written interaction）、オンライン（Online interaction）といった3種類のモードがあり、さらに口頭のやり取りは、対人関係（Interpersonal）、評価（Evaluative）、取引（Transactional）の3つに分類される。表1に、本研究に関わる口頭のやり取りの各区分にどのような言語活動が想定されているのかを示す。

表1 CEFR CV 口頭のやり取りの分類と言語活動

区分	言語活動
Interpersonal	Conversation
Evaluative	Informal discussion (with friends); Formal discussion (meetings); Goal-oriented collaboration
Transactional	Information exchange; Obtaining goods and services; Interviewing and being interviewed; Using telecommunications

表1の取引（Transactional）なら買い物で店員と交渉することや電話で修理を依頼するような言語活動、評価（Evaluative）なら社会問題についてディスカッションをするような言語活動が想定される。このようにやり取りが網羅する言語活動の種類は多岐にわたる。本研究ではこのような広範囲のやり取りを扱うのではなく、Small Talk や小学校中学年のやり取りが意図する「対人関係（Interpersonal）」の中の「会話（Conversation）」を扱う。CEFR CV（Council of Europe, 2020）では、「会話」は主に人間関係構築や維持といった社会的機能（social function）をもった言語使用を想定したものと説明している。CEFR CVでは、表1に示した言語活動ごとにCAN-DO ディスクリプタ（能力記述文）を記載している。本研究の対象である小学校・中学校の児童・生徒のレベルに近い Pre-A1から A2（下位）の学習者が、遂行可能な「会話」での言語使用について表2に示す。

表2 CEFR CVの口頭のやり取り(対人関係:会話)のCAN-DO ディスクリプタ²

レベル	CAN-DO ディスクリプタ
A2.1	非常に短い社交のやり取りには対応できるが、自発的に会話を進行するほどには理解ができない場合が多い。しかし相手の配慮があれば、理解してもらえる。簡単で日常の丁寧な形式の挨拶を述べることができる。 仲間、同僚、ホストファミリーと、ルーティンに関連する質問をしたりその答えを理解したりして簡単な言葉で会話をすることができる。 招待、提案、謝罪をしたり応じたりすることができる。 非常に基本的な表現を使って調子を伝えることができる。 好き嫌いを伝えることができる。
A1	こちらの事情を理解してくれる相手からの、はっきりゆっくり繰り返しを交えて伝えられた具体性のある単純な要求に応えるための日常表現を理解できる。 よくある話題(例 出身国、家族、学校)について基本的な事実についての簡単な会話に参加できる。 紹介したり基本的な挨拶や別れを告げる表現を使ったりすることができる。 調子を尋ねたり近況を聞いて反応したりすることができる。
Pre-A1	基本的な定型表現(“Yes,” “No,” “Excuse me,” “Please,” “Thank you,” “No, thank you,” “Sorry”)を理解し使用できる。 簡単な挨拶を認識できる。 簡単に挨拶したり名前を述べたり別れを告げたりすることができる。

表2のCAN-DO ディスクリプタは年齢、学習経験、国籍を問わないさまざまなタイプの言語使用者を想定しているため、日本の学校教育を受けている英語学習者により適した形にする必要がある。また、児童・生徒は表2のCAN-DO ディスクリプタで示されたような言語使用を容易に行っているように見えるかもしれない。しかし実際は、教員が事前に言語活動で使用する言語材料や会話の型を提示する支援を行っていることが多く、児童・生徒が独力でできているとは言えない場合もある。ある表現を学び、練習した直後にはそれを使用できても、時間が経過してから同じように使用できるとは限らないとの指摘もある(根岸・工藤, 2014)。これらを踏まえると、到達目標のCAN-DO ディスクリプタ作成時には、記載されているような言語使用が、教員からの支援なく、時間が経過してからも学習者が独力でできることを想定して設定する必要がある。ただし、小学校中学年の外国語活動では言語材料の定着を急がず慣れ親しむ段階であるため(文部科学省, 2018a)、「～できる」といった定着を求める表記はせず、十分に練習してきた語彙や表現がいかされる話題を提示してやり取りさせることを前提とする。

2.3 日本の外国語教育における会話方略指導

「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(報告)」(文部科学省教育課程部会, 2016)では、5領域における小・中・高等学校を一貫したCAN-DO形式の目標イメージが示され、それらにCEFRのPre-A1からB2までのレベルが紐付けられている。表2で示したCEFR CVのCAN-DO ディスクリプタを日本の学校教育に適した形にして、さらに方略

についても言及している。この中で、本研究に関わるやり取りの小学校・中学校に関連するPre-A1からA2レベルを抜粋して表3に示す³。

表3 小・中・高等学校を一貫した国の指標形式の目標イメージ

レベル	「やり取り」のCAN-DO ディスクリプタ
↑ 中 学 校	A2 日常生活や自分に関連した事柄に関する短い簡単なやりとりをすることができる。 身近な話題や興味関心のある事柄について、ある程度準備をすれば、会話に参加することができる。 身近な話題について、簡単な英語を用いて簡単な意見交換をすることができる。
	A1 相手の発話を理解できない場合など、必要に応じて、聞き返したり意味を確認したりすることができる。 相手のサポート（ゆっくり話す、繰り返す、言い換える、自分が言いたいことを表現するのに助け船をだしてくれるなど）があれば、ごく身近な話題について、簡単な表現を使って質疑応答をすることができる。
↑ 小 学 校	Pre-A1 挨拶やごく短い簡単な指示に応答することができる。 相手のサポート（ゆっくり話す、繰り返す、言い換える、自分が言いたいことを表現するのに助け船をだしてくれるなど）があれば、自分に関することについてごく簡単な質問に答えることができる。

表4 会話の方略⁴

方略	内容
会話の開始	対話のはじめにあいさつ “Hi.” “Hello.” “How are you?” “I’ m good. How are you?” など
繰り返し	相手の話した内容の中心となる語や文を繰り返して確かめること。 相手：I went to Tokyo. 自分：You went to Tokyo. または Tokyo. など
確かめ	相手の話した内容が聞き取れなかった場合に再度発話を促すこと。 “Excuse me?” “Say that again, please.”
ひと言感想	相手の話した内容に対して自分の感想を簡単に述べ、内容を理解していることを伝えること。 “That’ s nice.” “Really?” “Sounds good.” “No way.” など
さらに質問	相手の話した内容について、よりくわしく知るために、内容に関わる質問をすること。 相手： I like fruits. 自分： What fruits do you like? など
会話の終了	会話の終わりのあいさつ “Nice talking to you.” “You too.”

小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編によると、表3のPre-A1やA1のCAN-DO ディスクリプタで言及されている「相手のサポート」の相手とは、教員やALTはもちろん、グループやペアの児童を含むとされている（文部科学省，2018a）。つまり同程度の習熟度の児童同士のやり取りにおいても、互いに「ゆっくり話す」「繰り返す」「言い換える」「相手が言いたいことを表現するのに助け船をだす」といった方略を使用して、相手の言いたいことを理解したり、相手に伝わるように配慮したりすることが求められる。このような方略を指導することの有効性について報告している先行研究（例 Izumi, 2008）もあり、小学校だけに限らず中学校でも、会話を円滑に進めること⁵や会話を開始したり終わらせたりすることといった会話の方略の明示的指導が推奨される。表4は文部科学省（2017）の『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』や山田（2018）で提案されている小学校段階で指導する会話方略である。これらの方略を教員の支援なく独力で使用できるまでには十分な使用経験が必要であり、中学校段階でも引き続き指導をすることが必要である。小学校での指導を継続する形で中学校段階でもこれらの方略使用を考慮して目標設定を行う。

3. Small Talk の到達目標の手続き

本章では、児童・生徒の実態を踏まえた Small Talk の7年間の到達目標設定の過程と各学年の到達目標について詳述する。

3.1 児童・生徒の観察の目的・方法

前章で記した各種 CAN-DO ディスクリプタ及び附属小学校・中学校で使用している教科書の対話文を児童・生徒の実態に即したものとするために、また各校の取り組みを理解することの重要性を鑑み、表5のような観察を行って互いの児童・生徒の実態把握を試みた。その上で到達目標の素案は中学校全学年の指導経験のある附属中学校1年担当教員が行い、附属中学校

表5 児童・生徒観察の目的とその方法・内容

目的	方法・内容
学習開始時の実態把握	附属小学校と附属中学校の研究授業・公開授業を教員が互いに参観し、外国語活動（小学校3年）や外国語（小学校5年と中学校1年）の学習開始時のレベル感を得ることに努めた。
実際の発話の特徴・使用方略の把握	中学校では各学年の任意の生徒数人に、指定した話題で Small Talk を行ってもらい、ビデオ撮影を行った。小学校では研究授業時の児童のやり取り（3年生と5年生）のビデオ撮影を行った。生徒同士、児童同士の会話を書き起こし、発話の特徴、使用している方略を観察した（詳細は次節3.2参照）。
異校種・異学年交流を通じた児童・生徒の相手意識の醸成	双方向型オンライン授業で異校種、異学年交流を実施し、互いをよく知らない相手とやり取りする児童・生徒の様子を観察した。中学校と小学校の交流では各校代表者数名がやり取りを行い、小学校学年間交流では、ブレイクアウト・ルーム内で小グループでの交流を行った。下級生は上級生をロールモデルにして学び、上級生は下級生が理解できる表現を用いて話すといった習熟度の大きく異なる相手とのやり取りを経験した。

教員3名，附属小学校外国語活動・外国語担当教員2名，大学教員1名で構成される外国語活動・外国語部会で検討し，加筆した。さらに，教員全員がより具体的な児童・生徒のゴール・イメージを描くことができるように対話例を作成した。この対話例は主に小学校部分は小学校教員2名が，中学校部分は中学校1年生担当教員が作成した。

3.2 中学1年生のやり取りの実態

本節では，表5の手続きで観察した児童・生徒のやり取りの中から，中学1年生の同じ生徒2名が9月と12月に行ったやり取りを紹介する。話題を「本」と指定し⁶，使用する言語材料や会話の型は指定せずに，2分程度自由に対話を続けるように指示した。ビデオ撮影と書き起こしは中学1年生担当の教員が行った。S1とS2は【抜粋1】（9月）と【抜粋2】（12月）で同じ生徒のことを指している。また文法上の誤りは訂正せずに記している。

【抜粋1】9月のやり取り⁷

((会話開始部省略))

1 S1: What, what, do you like book?

2 S2: Yes. I read books. What book do you like?

3 S1: I like mystery book.

4 S2: Ah, mystery. Me too, me too.

5 S1: I don't like horror manga.

6 S2: I don't know. What, mystery, book name?

7 S1: I like *Meitantei Conan*.

8 S2: Oh.

(0.3)

9 S1: Can you read fast, can you read fast book, はやく読むの?

10 S2: Ah, so so. A little fast.

11 S1: I read, me too so so. Where is read books, place?

12 S2: I read my room. How about you?

13 S1: I read, living.

14 S2: Living. Do you go to library?

15 S1: Ah, no, no.

16 S2: Ah, no, all right.

((会話終了部省略))

【抜粋2】12月のやり取り

((会話開始部省略))

1 S1: Um: do you like book?

2 S2: Yes, yes, I like book.

3 S1: Oh: what book do you like?

4 S2: I like *Meitantei Conan*.

5 S1: Oh, *Conan*. (.) (see) I see.

- 6 S2: Conan is very interesting.
 7 S1: Yes, interesting.
 8 S2: So: please: why don't you read Conan?
 9 S1: OK. I: I read. Oh: I like *Harry Potter*.
 10 S2: *Harry Potter*. I know I know.
 11 S1: *Harry Potter* is interesting.
 12 S2: Yes. (.) What, who is your favorite character?
 13 S1: Character? Yes, I like: *Harry Potter*.
 14 S2: Oh, *Harry Potter*.
 15 S1: He can use magic and (.) he is very cool.
 16 S2: Magic? Magic(.)
 17 S1: Yes, magic. *Maho* in Japanese.
 18 S2: Oh, I see. Yes, cool. I like *Dumbledore*.
 19 S1: Oh, *Dumbledore*. I like him. He is kind.
 20 S2: What story do you like?
 21 S1: I like: all series (.) but I love *Hono no Goblet*.
 22 S2: Oh, that's good. I: watched: movie.
 23 S1: Oh, movie. (.) OK, OK. Please read the book.

((会話終了部省略))

「会話の発展」に関して、【抜粋1】の9月段階では「読む速さ」(9-11行目)や「読む場所」(11-16行目)など、「読むこと」に関連した情報について慣れ親しんだ助動詞 *can* や疑問詞 *where* を使用してやり取りを行っている。S1が7行目で名探偵コナンが好きなことを伝えた後、S2が8行目で“*Oh.*”と述べるに留まるなど、本の内容を掘り下げる様子は見られなかった。この段階では、「読むこと」に関連した会話は行うことができるが、1つの事柄(例「読む速さ」)についての会話を発展させるために質問したり意見を述べたりするといった方略が不足していた可能性がある。【抜粋2】の12月段階では、互いの好きな本のタイトル(4, 9行目)、その感想(6, 11行目)、好きな登場人物(13, 18行目)とその理由(15, 19行目)、ハリーポッターシリーズで好きな話(21行目)といったように、互いの好きな本、特にハリーポッターについて感想を伝えたり、関連する情報を引き出したりして会話を発展させる様子がみられた。1つの事柄を発展させて会話ができる力が向上したことについて、*Small Talk* の継続的な取り組みと教員が行った方略の明示的指導の成果だと考える。このように、中学1年生では「相手の話した内容を理解して感想を伝えたり、関連する質問をしたりする」方略が使用できることを到達目標の中を含め、本だけに限らず、さまざまな話題で12月段階のような生徒同士の会話が行うことができるように指導したい。

「会話の方略」に関して、12月のやり取りでコミュニケーションの修復を行うための補償方略を使用する様子が見られた。16行目で“*Magic? Magic (.)*”と、*magic* という語の意味がわからない様子を示したS2に対して、S1が咄嗟の判断で、“*Maho in Japanese.*” (17行目)と述べている。S1は“*language switch*” (Tarone, 1981) と呼ばれる母語への切り替えの方略を用いて対話の修復を試みている。S2が“*Oh, I see.*” (18行目)と述べたことからその方略がう

まく機能したことが窺える。母語が同じでない相手とのやり取りでは language switch を使用せず別の方略を用いる場合が多いが、S1が行ったようにコミュニケーションの流れを止めないことを優先し、その場面で最適な方略を選んで駆使する能力はやり取りを行う上で欠かせない。また、リアクションについて、相手の発言をそのまま、あるいは一部を繰り返して、“participatory listenership” (Tannen, 2007) という相手の言った内容を理解していることを示したり相手の発言を受け入れたりする方略が12月段階ではS1とS2両方により頻繁に見られるようになった(5, 7, 10, 14, 17, 19, 23行目)。小学校で指導されてきた「繰り返し」の方略が、中学校段階で、繰り返す語句にさまざまな意味を加えて主体的に使用されている様子が窺える。

上記のような定期的な観察を通して、各段階での生徒のやり取りで「できること」、9月から12月で「できるようになったこと」が確認できた。今後「できるようになってほしいこと」を到達目標として据え、その目標達成に向けた指導方針を小学校・中学校の全教員で検討することが重要であると考えられる。

4. 到達目標設定と具現化された対話例

小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編には、外国語活動の「知識及び技能」について外国語の音声や基本的な表現の定着を求めるのではなく慣れ親しむことを中心とすることが記載されている(文部科学省, 2018a)。この「知識及び技能」の目標を鑑みて、中学年のやり取りの言語活動については「教員が児童に使用する表現を十分に想起させた上で」といった条件のもと、学んだ定型表現を用いてやり取りをすることを想定して設定した。中学校では、話題にあわせた語彙や表現を教員が事前に想起させずとも、生徒自身が心的辞書から適切な表現を検索して即興的に対応することを想定している。生徒の即興性のあるやり取りを可能とするために、その接続となる高学年で、慣れ親しみから定着へと移行し、独力でできることを増やして中学校へとつなぐ目標設定が必要となる。表6.1は小学校の、表6.2は中学校の Small Talk の到達目標である。到達目標を「内容・相手意識」「方略」に細分化することで、手立てを講じやすくした。また、7年間の習熟段階を一元的に確認できるように、全学年で「本」を共通の話題にして対話例を作成した。

表 6.1 小学校中学年やり取りの言語活動と高学年 Small Talk の到達目標

到達目標	具現化された対話例
<p>中学年</p> <p>指定された基本的な定型表現を用いて、挨拶や個人的な話題についての質問したり理解したりする。また、それに応答する。《CEFR PreA1》</p> <p>内容・相手意識</p> <ul style="list-style-type: none"> ・簡単な挨拶をする。 ・指定された基本的な定型表現や既習の語句を用いて自分のことを伝える。 ・指定された基本的な定型表現を用いて質問したり答えたりする。 ・相手の顔を見て、大きく、はっきりとした声で話している。 <p>方略</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員の合図で基本的な定型表現を用いて会話を始めたり終わらせたりする。 ・相手の発話内容に、数種類の定型表現から適切なものを選びリアクションする。 	<p>(教員が児童に使用する表現を十分に想起させた上で)</p> <p>S1: Hello, O. How are you? S2: Hi, O O. I' m fine. And you? S1: I' m OK. I like books. Do you like books? S2: Yes, I do. What book do you like? S1: I like <i>Harry Potter</i>. S2: Me, too! S1: How about you? S2: I like O O <i>himitsu</i>. S1. I see.</p> <p>(合図)</p> <p>S1: Nice talking to you. S2: Nice talking to you, too.</p> <p>(教員が児童に使用する表現をある程度想起させた上で)</p> <p>※対話の開始は中学年に同じ</p> <p>S1: Do you like books? S2: Yes, I do. I like books. S1: Me, too. What' s your favorite book? S2: My favorite book is <i>Harry Potter</i>. S1: You like Harry Potter. What character do you like? S2: I like Harry. He is cool. What' s your favorite book? S1: My favorite book is "O O <i>no himitsu</i>." It' s interesting. S2: That' s nice.</p> <p>(合図)</p> <p>※対話の終了は中学年に同じ</p>
<p>高学年</p> <p>指定された基本的な定型表現を<u>主に</u>用いて、個人的な話題について質問したり内容を理解したりすることができる。また、それに応答することができる。</p> <p>《CEFR PreA1-A1》</p> <p>内容・相手意識</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学年の内容と同じ。ただし、教員が児童に使用する表現を十分に想起させることが前提となっている中学年から発展させ、高学年では教員が表現を想起させる場合と自分で適切な表現を既習事項の中から抽出し使用する場合とがある。 <p>方略</p> <p>(中学年の内容に加え)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手の発話内容に、繰り返しや短い感想を述べるなどのリアクションをしたり、関連する行動(動作や表情)をとったりすることができる。 	

表 6.2 中学校の Small Talk の到達目標

	到達目標	具現化された対話例
<p>中 1</p> <p>指定された定型表現や既習の言語材料を用いて、指定された話題について、自分自身や自分の生活に関連するものの情報を伝えたり、質疑応答を交えて簡単な意見交換をしたりすることができる。 《CEFR A1》</p> <p>内容・相手意識 (小学校の内容に加え)</p> <ul style="list-style-type: none"> 指定された話題に応じて、相手に自分のことを伝えたり、相手に質問をしたりすることができる。また相手の質問に答えることができる。 相手の話した内容を理解して感想を伝えたり、関連する質問をしたりすることができる。 大きくはつきりとした声で話したり、状況に応じてジェスチャーや実物を用いたりして伝わりやすいように工夫している。 <p>方略 (小学校の内容に加え)</p> <ul style="list-style-type: none"> 相手の発話内容にリアクション(言葉・動作・表情)をし、意見や質問をして会話を続けることができる。 相手に内容が伝わらない時、適切な語句が出てこない時など、別の語句を使用して伝えることができる。 	<p>(中学段階は即興的に行われることを前提としている)</p> <p>S1: Hello, O. How are you? S2: Hi, O O. I' m fine. And you? S1: I' m Ok. Let' s talk about books. Do you like books? S2: Yes, I do. I read a book every day. Do you like books? S1: Yes. I like O O. Do you know it? S2: No, I don' t. Tell me about it. S1: It' s a story of tennis players. It' s interesting. S2: Sounds nice. S1: What book do you read? S2: I' m reading this. S1: Oh, I know it. It' s popular. I want to read it, too. (合図) S1: Nice talking to you. See you. S2: See you.</p>	
<p>中 2</p> <p>定型表現や既習の言語材料を用いて、選んだり指定されたりした話題について、自分自身や自分の生活に関連するものの情報を伝えたり根拠を加えながら意見交換をしたりすることができる。《CEFR A1》</p> <p>内容・相手意識 (中 1 の内容に加え)</p> <ul style="list-style-type: none"> 相手の質問に、根拠を加えながら具体的に答えることができる。 相手の話した内容を理解して感想を伝えたり、関連する情報提供や質問をしたりすることができる。 	<p>※対話の開始は中 1 と同じ</p> <p>S1: I want to talk about books today. Is it OK? S2: Sure. Let' s start. S1: I like reading books. I' m reading this book now. This is a mystery story. S2: I know it. It is popular. I like this author' s books. I especially like O. S1: I don' t know about it. What is it about?</p>	

到達目標	具現化された対話例
<p>中2</p> <p>方略</p> <p>(中1の内容に加え)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話題を発展させながら会話を続けることができる (ターンを保持して2文以上の描写・説明をする)。 	<p>S2: It's a story of high school students.</p> <p>S1: I see. Why do you like it?</p> <p>S2: They all have a secret. The ending is surprising and scary! Mr. ○ also likes it.</p> <p>S2: Really? I'll talk to him later. (合図)</p> <p>※対話の終了は中1と同じ</p>
<p>中3</p> <p>日常的及び社会的な話題について、既習の言語材料を用いて、事実や自分の意見・感想に根拠を加えながら意見交換を続け、話の展開に応じたやり取りで会話を終わらせることができる。《CEFR A2.1》</p> <p>内容・相手意識</p> <p>(中2の内容に加え)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手の質問に例や根拠を加えて答えることができる。 ・相手の顔を見て相手の理解状況に応じて語彙選択やスピード調整したり, ジェスチャーを交えたりすることができる。 <p>方略 (「相手意識」と重複する場合がある)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話の運びに忠じて、自分の意向や相手への声掛けを行い、会話を終わらせることができる。 ・相手の立場や状況に応じて、新たな話題を提供して話を続けることができる。 ・接続詞や順序性を表す語句を用いて説明し、話題の幅を広げながら会話を続けることができる (ターンを保持して詳しく説明する)。 	<p>※対話の開始は中1と同じ</p> <p>S1: Do you know any interesting books?</p> <p>S2: I'm reading ○ now. Do you know it?</p> <p>S1: No. Tell me about it.</p> <p>S2: It's a mystery like <i>Conan</i>. An old man lives in an old house. He always has a big bag. He has a secret in the bag. Mystery stories make me excited.</p> <p>S1: Sounds interesting!</p> <p>S2: What book do you like?</p> <p>S1: I don't read books. When I read books, I feel sleepy.</p> <p>S2: How about movies? Do you like Disney?</p> <p>S1: Yes. I like <i>Toy Story</i>.</p> <p>S2: <i>Toy Story</i>! I like its story and music. Why do you like it?</p> <p>S1: Characters are cute. I like Buzz Lightyear the best.</p> <p>S2: Good. I like Rex. Oh, there are some Disney books. They are also good. First, English is easy. Second, they are not long. Finally, they have nice pictures. I'm sure you can enjoy reading them.</p> <p>S1: I see. That sounds good. (合図)</p> <p>Thank you for your idea. I'll check them later.</p> <p>S2: You're welcome.</p>

5. おわりに

本稿では小学校から中学校への学びの接続を意識した指導の在り方を検討し、児童・生徒の実態を踏まえた7年間の Small Talk（小学校中学年ではやり取りの言語活動）の到達目標と設定の過程について詳述した。この到達目標と具現化された対話例の十分な検証はこれからであり、今後指導と評価を繰り返して更新・改良していく必要がある。さらに、小中一貫の到達目標を5領域で検討し、その先にある高等学校につなぐものにも課題である。作成そのものの意義に加え、その更新・改良の過程で、小学校と中学校の教員が、互いの授業を参観するなどして児童・生徒の学習状況を把握し、児童・生徒に「身につけさせたい力」とそのための系統的な指導法を共に検討することに意義がある。そして児童・生徒が目標を達成できるように協働で支援する体制づくりをすることが重要だと考える。

注

- ¹ 本研究で扱う「やり取り」はすべて口頭でのやり取り（Spoken Interaction）のことである。
- ² CAN-DO ディスクリプタは、吉島・大橋（2014）の CEFR 日本語版第3版を参照し、筆者が CEFR CV 用として翻訳した。次節に示す「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（報告）」（文部科学省教育課程部会、2016）にもあるように、中学校段階は A2 の下位あたりに留まっていることを考慮し、Pre-A1 から A2.1 レベルまでのディスクリプタを表2に記載した。
- ³ 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）」（文部科学省教育課程部会、2016）では、CAN-DO ディスクリプタは教師視点（「～できるようにする」）で記載されているが、本研究では児童・生徒のやり取りの到達目標の設定を主眼にしているため、児童・生徒の視点（「～できる」）と修正している。
- ⁴ 『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』（文部科学省、2017, p.84）と山田（2018）を参照して筆者が作成した。
- ⁵ 意思疎通がうまくできない場合の修復を含む。
- ⁶ 次節に示す「具現化された対話例」では、「本」を話題としてやり取りを行った生徒の対話を基にして作成している。
- ⁷ トランスクリプション記号は西阪（2008）を参照した。「:」は音声の引き伸ばし、「(数字)」は沈黙の間合いであり0.2秒以下の短い間合いは「(.)」と示される。「()」は聞き取りが困難な箇所、「(()）」は注や発言の要約等を示している。

引用文献

- Council of Europe. (2001). *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge University Press.
- Council of Europe. (2020). *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment: Companion volume*. Council of Europe Publishing.
- ELEC 同友会英語教育学会実践研究部会（2008）. 『段階的スピーキング活動42』三省堂
- 本多敏幸・金森強他（2021）. 『ONE WORLD English course 1』教育出版
- Izumi, E. (2008). The effectiveness of teaching communication strategies through explicit task-based instruction. *Annual Review of English Language Education in Japan*, 19, 171-180.
- 文部科学省（2017）. 『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』 Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm（2021年10月12日）
- 文部科学省（2018a）. 『小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編』開隆堂出版
- 文部科学省（2018b）. 『中学校学習指導要領解説外国語編』開隆堂出版

- 文部科学省 (2019) . 『高等学校学習指導要領解説外国語編英語編』 開隆堂出版
- 文部科学省教育課程部会 (2016) . 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて (報告)」
Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004gaiyou/1377051.htm (2021年12月20日)
- 根岸雅史他 (2021) . 『NEW CROWN English series 1』 三省堂
- 根岸雅史・工藤洋路 (2014) . 『中学校英語 CAN-DO リスト作成のヒントと実践例』 三省堂
- 西坂仰 (2008) . 「トランスクリプションのための記号」 <http://www.meijigakuin.ac.jp/~aug/transsym.htm> (2021年12月20日)
- 太田洋他 (2021) . 『Here we go! English course 1』 光村図書
- Tannen, D. (2007) . *Talking voices: Repetition, dialogue, and imagery in conversational discourse*. Cambridge University Press.
- Tarone, E. (1981) . Some thoughts on the notion of communication strategy. *TESOL Quarterly*, 15, 285-295.
- 山田誠志 (編) (2018) . 『自分の本当の気持ちを「考えながら話す」小学校英語授業：使いながら身につける英語教育の実現』 日本標準
- 吉島茂・大橋理枝他 (訳・編) (2014) . 『外国語教育Ⅱ 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』 朝日出版社